



松通落葉

卷

1卷5
401
4





松之落葉三乃卷

加茂の御社

かまの御社に伊勢の大御神の宮ありて朝廷より
 ねんじりやまの御社に伊勢の御社ありて朝廷より
 ねんじりやまの御社に伊勢の御社ありて朝廷より
 延喜式十二卷内記の條より凡宣命文者皆以黄紙書
 之但奉伊勢大神宮文以縹紙書加茂社以紅紙書と見
 たりと云ふは神の御社に於ては黄紙を以てし
 たりと云ふは玉依姫可茂別雷命の御社に於ては
 赤紙を以てし上社ハ神武天皇下社ハ鷓鴣草葺不合尊を



十二年於くづり奉幣加茂御祖別雷兩社祈止霖雨と
あるところの告文に中より皇大神御社余といふなり見え
くづり例ともてしむる屋ハ大なるハ社といふも續日
本後紀一乃卷天長十年於くづり奉幣於加茂大神宮と
見ゆるハ宮といひしなり此御社上下といふを地にたり
しとくもあま北なる線上と南なるを下とせり神の御品
は上下よりいへば下乃御社ハ別雷神の御母神なりとせむ
るなりけりなりとくづりぬるハ延暦九年於く賀茂下上
二社從二位といふと續日本紀に見え日本後紀弘仁十
年於くづりよは山城國愛宕郡加茂御祖并別雷二神之

祭空准中祀と見えしはよきとくづり上下并あるを
あるハお中子といふが如くは中於けり子と後とすは朝
延みなりとくづりいふもあま大神の御志ありと
なりとくづりけり從二位よりせたりいふも
あるはなりとくづりけり續日本紀ハ下上二社と
ありとも續日本後紀ハ三ともなりとくづり鴨上下とありと
ありこハ神といふも大神なるは下上といふをちとやう
なり此紀かき人乃けりてくづりあり上下とあり
ども此御時より下をのちけりけりいふもあま後とハ
同紀十一卷承和九年於くづりハ鴨御祖鴨別雷と見え

くもふくまゆる。延喜のころもいづるも式に加茂下上又ハ
下上兩社下社上社をいふ事なりし見えり加茂
行幸れりをもいふも万須鏡より野の雪の巻を申の時ふ
まが下の宮小行幸れり上れ御より小まきでさせたり
賞ねりむもなむとてくも御ハあもがこもぞちりりり
とあり江家次第第二十の巻賀茂詣のころに見えりも
下の社ついでに上の社加茂祭の齋王乃まわりたりも延喜式
六の巻小見えりやうらん此祭の御使も下れりよとれ
たり上にはわりありと昔今もいひかゝるがみと下と
ちふと上をのらとたりも江家次第第十の巻

見えり。加茂臨時祭のも次使搦御幣立先上社次下社
松尾等取加之とぞありり。此臨時祭ハ亭子に帝のまを
と申る時もいふやしろ思ほり鷹つひひをびり
あまをり加茂の明神翁とありあり冬を祭を
いひたりて寛平の年のまをり翁と
ありそれとてハもの神も別雷皇大神とあり
よりねをいひたりて此祭のまが上社といふた
らんとはともれりも上社といふるハあり
これれを例といふてしおわけ例とて中子の大神のまを
といたり下御社をいふに上のみなり次第よりこれ

とて神のみまはむくくしとてくみまもあしとて
えのぞしきつもんを加茂のふりの若御社の正しれはど
めやとつゝあれうと

賀茂祭の勅使

賀茂祭といひしおのまきつりけしむれ物語よきし
るふかむといふぞまうとれまかりはふれふれむの
つゝればるり北山抄四の巻神事れづりに見えたるや朝
廷あく神事まうりたつと大祀中祀小祀といふまきつり
大祀ハ踐祚大嘗祭會中祀ハ祈年月次神嘗毎季大嘗祭
小祀といふとつゝあうと賀茂祭ハ此中祀よなごう

とて日本後紀弘仁十年れづりに見えたりけし社ハ
かろくぬもこれ小祀とれづり祭るまはふれなごひ
かろく祭とのつひてもとるりとあれと事つあり
らんし北山抄四の巻ハ賀茂祭爲中祀諸司齋之園韓
神松尾平野春日大原野等祭爲小祀といひて見えて
しとて此祭乃勅使つゝハ内藏頭と人あく内藏寮と
て出さ大内にはかり見え奉りてかをいりのすゝとあつれ
とつゝ續日本後紀五乃卷承和三年四月乙酉れ日のこを
とつゝり且天皇御紫宸殿閱覽賀茂祭使等鞍馬調飾
并從者容儀賜使等祿以播磨守從四位下橘朝臣永雄

くらりあら奉幣於明神報豐稔也と見えし事なり
 同トやうにおきりし事なり文德實錄仁壽元年乃
 くらりみ詔以近江國散久難度神列於明神と見えし
 同ト神社を延喜神名式に佐久奈度神社名神トキ
 されし事なり名神明神同ト記しし事なり國に
 明神と記しし事なり神名式に世に國史に
 見えし事なりやうに事なりし事なり勅使より幣を
 せりし事なり吉備乃みらに中み明神と記しし事なり
 高尚がけりし事なり大神のみなりし事なり此國
 人乃らに事なりやうに事なりし事なり

いひし事なり名神も明神も字音よりかきし
 文字と見ゆれむがに吳音にやうにと記しし事なり
 又いし事なり明神ト大ト記しし事なり例あり
 三代實錄仁和二年の宣命に文に松尾大明神と見えし事
 ありし事なり大御神大神と尊と記しし事なり
 例ありし事なり文字と記しし事なり
 やうにと記しし事なり今もやうに記しし事なり
 されし事なり大明神と世人のいひあり
 されし事なり大明神と記しし事なり
 くらり般若心經といふ事なり見ゆし事なり

とをねらふ乃日ごとくあれを佛成さしむる事同トも
ひり伊勢にまひ大御神にこれをもいひききひたす
るやまのいつく日本後紀十の巻今日本後紀四の
改葬等事以齋内親王入伊勢也と見え續日本後紀四の
卷承和元年八月の巻にみ禁京畿之内來月供北辰灯
以齋内親王可入伊勢也と見え延喜式五の巻に凡齋
王將入大神宮之時自九月一日京畿内伊勢近江等國
不得奉燈北辰及舉哀改葬とも見ゆにばかり舉哀改葬ハ
いふにたのむのむをねらひにむもまはさすハ
つとまを神をまつるまを天照大御神にゆき少と

御心をたより佛をさしむるもゆきあをさすん
されを神の宮人にもいふもゆきあをさすん
しと星の神をまつるはま事なり

齋女

伊勢の齋宮加茂の齋院に内親王のちせたりハ
いひねらむる國史にみえいふの記録に物語に
みもみずし見えこれ人をさしむる春日大原野
齋女にみえいふに三代實錄十五の巻貞觀
十年にみえいふ宣詔内外に春日大原野兩社齋女藤原
朝臣可多子大政官貞觀八年十二月二十五日下所司

臣轉執授中臣女執奉御訖退授中臣轉授宮主宮主取
授後取卜部荒世事畢退出亦口引和世進退如荒世
儀其荒服者賜卜部ニキクアミソハ和服者賜宮主訖皆退出臨河解除
而ニ太ニ見ニえニくニはニくニおニのニかニつニとニぢニくニ荒アラニキ和ニ被ニとニつニくニ荒
和乃御服にニりニるニ名ニ附ニくニこニくニ以ニ考ニ（ニまニるニこニ）ニ江家次第七の
卷六月晦日れニくニるニあニをニ縫殿寮奉荒世和世御服事神祇
官奉荒世和世御贖事ニもニり

神遊巫舞

かニとニりニくニびニ城ニ中ニくニらニくニらニいニかニぐニとニつニいニかニみニのニとニをニちニつニとニ終
よニかニんニちニだニとニつニりニ和名抄ニ巫和名如牟奈岐祝女也ニとニ見ニえニくニ今

みニとニつニふニのニあニどニあニつニくニさニてニ此ニのニむニちニをニ今ニもニりニのニ神
乃社ニあニくニくニがニくニくニ以ニ舞ニすニ手ニはニ鈴ニやニりニりニ此ニ舞ニハニ天ニ鈿ニ女
あニくニ竹ニはニくニくニらニくニ手ニはニ鈴ニやニりニりニ此ニ舞ニハニ天ニ鈿ニ女
命ニのニ石ニ窟ニ戸ニはニ前ニあニくニ竹ニ葉ニ飯ニ穂ニ木ニ葉ニとニ手カクチ草ニとニ手ニにニ著ナ
鐸ギ之ノ矛ハコはニくニらニてニ歌ニ舞ニしニらニくニいニとニまニるニぶニらニんニ北山抄
一ニはニ卷ニ園ニ韓ニ神ニ祭ニれニくニらニにニ祝ニ師ニ申ニ祝ニ詞ニ上ニ卿ニ以下ニ拍ニ手ニ次
引廻御馬七足引出次神遊御巫舞と見え江家次第五の
卷大原野祭れニくニらニいニ和舞和舞取賢木枝舞也と見えかニぐニらニのニ採
物ニはニ歌ニとニ賢ニ木ニ篠ニのニあニくニらニりニふニ中ニくニらニのニ巫ニはニ舞ニもニ大ニくニ
今乃世のやうにぞひくまらん

神のまゝなり木綿つひける賢木とらつる事

神のみまゝなり木綿つひける賢木をたつるハ神代ニ磐戸の前
みかゝるものの中に真賢木の枝アヲニギテ青和幣ニラニギテ白和幣ニギテ哉カキもく
さげきもくをあらぬのあらり形古語拾遺尔見カキるやう青
和幣ハ麻白和幣ハ穀木カキハはくもく木綿ユを麻と木
綿とをけくぶるもくをあらぬ此ゆゑの枝カキハ木綿とつひけるハ
いひるものハ古哥カキハはくもくの枝ハ木綿とつひけるハ
マコ麻とつひけるもくをあらぬもくもくハ神カキははくもく
木綿ユを布カキ織カキるものハ萬葉ニハ卷の哥ユハ木綿ユト
取持ト而如此谷母吾波乞嘗君爾不相鴨カキといふ又同集カキハ

卷の哥ユハ木綿ユ疊手向乃山乎カキといふはるり布とあはみ
手にカキとつひける又ハりの小ねをてまてまつるをといふ同集三の
卷の哥ユハ寧樂ナラ乃手祭爾置幣者カキといふをねづし又糸
るカキるものもといふ同集三ハ卷の奥山オクヤマ乃賢木之枝カキ爾白香
付木綿取付而齋戸乎忌穿居カキといふる哥ハ木綿ハあはみ
つカキといふ糸とつひ賢木の枝ハはくもく木綿乃とつひ磐戸カキ
まカキのハ和幣ニギテといふは織カキる布とつひなるはみやのカキはくもく
るカキるハ木綿乃糸とつひはくもくねカキるものもくもくといふ
萬葉集ハ哥ユハはくもくはくもく採物の哥ユハはくもく葉カキハあはみ
とつひけるはくもく神乃カキといふはくもくといふはくもくといふ

玉もつとてはるり日本書紀仁徳天皇の巻に勅雄鯽等莫
取皇女所齎之足玉手玉と見え又二女之手有纏良珠
と云ふをわたりし手山も足山も玉すれりかざるにせしむ
同巻より取得田道之手纏與其妻と云ふ手纏も玉すべし
履中天皇紀尔是夜仲皇子忘手鈴於黑媛之家而歸焉
とありしは玉すべしと云ふは男も玉鈴を手にすれり
と云ふ又云玉すべしと云ふは神代より玉すべしと云ふ
哥ふと云ふ玉すべしと云ふは玉すべしと云ふ玉すべし
とい安閑天皇紀ハ幡媛偷取物部大連尾輿瓔珞と見え
云ふは玉すべし

百姓

いふは百姓といふは大宮はるり世に人びと云ふは百姓
をり日本書紀持統天皇の巻に詔令天下百姓服黄色衣
と云ふは見えし大宮はるり人びと云ふは百姓と云ふは
衣の色も云ふは百姓はるりぬりて人をいふは百姓又職員
令の左京職はるり大夫一人掌左京戸口名籍字養
百姓云事と見えしは京はるり人びと云ふは百姓と云ふは
はるり民はるり今世の百姓はるり

奴

奴ハ賤ともいふ人の家より云ふは奴と云ふは人乃云れはるり

とくしつらにちつらむむかへん月をいづらんすれお
らりしよわしじもむむとささすありきるとはつ見く
きつらういもみさしむるよ大夫といひさすらたふひま
そのはひりかさはさあうくひのなかりしのはつらり
那ん大和物語よ鳥飼の院よそめふあふふれれふも
まはつらりてさむいふ中に聲をわらうくはつらりて
やとささあはふよと見ゆれとささあふふとささあふ
ささい今やう哥えさささささささささささささささ
つら乃世よ遊女といふのハ名よなひてよめしわらわら
枕うりささあふふとささあふふとささあふふとささあ

遊女ハ今乃世ハ藝子といふものも似ありり平家物語よ
ハハさびりの中にささあ舞まふは白拍子といひりささあ此
らられ舞子といふものふかさうりく似りかひひをささ
ささささささささささささささささささささささ
白拍子ふもいひささ秋みらささささささささささ
哥いみもあうれくしされどいみし人ハあささささ
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
とさささささささささささささささささささささ
さこれともささささささささささささささささ
とさささささささささささささささささささささ

名よりねてはあふ坂山れは流るる人よまをきでらるるりか
とよ哥とねのがらるるやうむうし今ありとある注釋よひては
といふんよあまねしういひつけなまひしあふとれ事とど
あふふとあふとどさささやうからんよハもが先乃五とどわが
中ハとやうめいづと詞ねまらほさう名よりあまねばとらさうに
いふまじれとぞ後撰集の哥よと女ねりよふはくしんさう
此とぞむうれ例乃これ集のらをあふといひつとぞあまねば
んさ神といふ女ねりらにつらさうとねとあまねらんよハとれあや
まふ人ハあふとを同集よ人の心はくくあうにたれまをきといふ
人をつらひつとと詞とさうして人志まねらがるのねまひのあまね

とバ袖よつとぞとぞ見まをきとらるるよとよ哥乃例もらるるや
さうとらひといふ名乃女ねらんよハ名よりあまねばとね家はま
さざふまねれらうとねといふ名はらひらづといひねらまを
哥なる名あしあふとぞあふとさうんみやと鳥といふとあひ
合せてもさうとあふとぞあふとぞあふとぞ此御哥乃あふとぞい
まが名をねといひてさねらうと名まあつとあふとぞ
いふとねるあふ坂山のまをきとらるるのあふとれあふに人よまを
ずといふまのびとさうとらるるのあふとれとあふとらるるまを
らね縁語なりかといふとらるるのあふとれとあふとらるるまを
葉は名まをき殿らまあうとらるるのあふとれとあふとらるるまを

こころえしうばいしきづりしげんさうしきねんとこのまひて
かんぜうむなむいふとくじんかうりね

さなうりう

故鈴乃屋大人おのれハ萬葉集なる鹿の字ハこれ加
らむじりあうとらみくハじりも文字のまうてまうじり
まうあもわらふん牡鹿と牡の字城さうまうり心をほく
し鹿の字城しうとらみくとあしハまうじりあうり
かりといふは此考にうりてあう人さ城しう事さうハ牡
鹿とささいとらみくといふ詞あうをハ小乃とらねんとい
へりこれ万葉集し左小牡鹿ともれれむがにさうあう

やうるれどとらみくしけりしうあうりしけと小とあう

ゆきしる例も見えびとらみくといふ詞をハ男あうしハ鹿

鹿一和名抄ニ鹿和名加とあれども昔よりあうともいひつんと

わらうとらみくハ同書小麋於保加新撰字鏡一麋久自如又於保自加とらハ皆

大鹿おらうりく大牡鹿の心をいひ又万葉集ハ名卷

三十八呼立而鳴奈流鹿之同卷三十九猪養山爾伏鹿之同

卷四十八秋芽子師警藝鳴鹿毛同卷同山下響鳴鹿之同

卷四十九秋野乎且往鹿乃と見えさう哥ぶもこれしうとら

むくうとらみくハあうとらみくハ鹿をしうともいひしう

いふしうらうあう牡鹿しあうりしう名ハあうらうらう

ちりきとくごし那れぬらるるをさるるあは
 山上憶良詠秋野花歌秋野爾咲有花乎指折可伎數
 者七種花其一芽之花花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤
 袴朝貌之花其二とあるちをいふさかぶるをさむとい
 一ハ大々秋乃野咲花のあるかさうをさるるあは
咲咲くふくふくは花城さるるいふやも朝負と結
 梗藤袴ハ菊ふれはふ秋乃野咲花のあるかさうをさるるあは
 ちりきとくごしと蘭さるるをさるるあは野咲花のあるかさうを
 乃がふふふ花咲花のあるかさうをさるるあは類聚國史卷三十一帝王
 部少も平城天皇大同二年九月咲花のあるかさうをさるるあは乙巳幸神泉苑

琴歌間奏四位已上共插菊花于時皇太弟頌歌云美那
 比度乃曾能可邇米豆雷布智波賀麻岐美能於保母能
 多乎利太流祁布上和之曰遠流比度能己己呂乃麻丹
 真布智波賀麻宇倍伊呂布賀久爾保比多理介利と見
 えさる插菊花とつて御哥にさるるあはとくごしとくごしと
 菊ハあはれぬらるるをさるるあはとくごしとくごしと延暦の帝ハ
 さるるあはとくごしとくごしと花ハさるるあはとくごしとくごしと
 ちりきとくごしとくごしとくごしとくごしとくごしとくごしと
 插菊花とつて此菊ハ蘭の字ハ誤を寫傳一ハ好くしと
 上田秋成ハいつとくごしとくごしとくごしと日本後紀一ト同ト御

そはまうとらて新撰字鏡下かきより和名抄よかき
らまがとあしはるよれん此よ書ハ世の人乃つふふ
考ハくそまねひがあと多し蘭蕙ハ此字鏡下香艸
乎支とかきまごまの名よ正しくハあま高尙ハ
らうかむいけあ乃ま部らうむしにらあまて菊の
らまらまらまらむあまらまら

菊の香を綿ふら

菊よわらまらハ花乃香を綿ふら
し香をまらまらまら清少納言乃枕
冊子ハ九月九日ハ曉くまら雨すまら露もら

くまらまら綿ふら
りてまらまらまら春曙抄
此冊子ハらら綿をまらハ菊
らら寒霜をまらまら後撰集
むが説もあま今まら
住まらら時九月八日伊勢が家乃らら綿をまら
はらら又まらまら詞
らら伊勢の御孫哥まらら九月八日
綿ふらら九日の重陽宴ふらら香を
まらまら又のまらら綿をまらら折てら

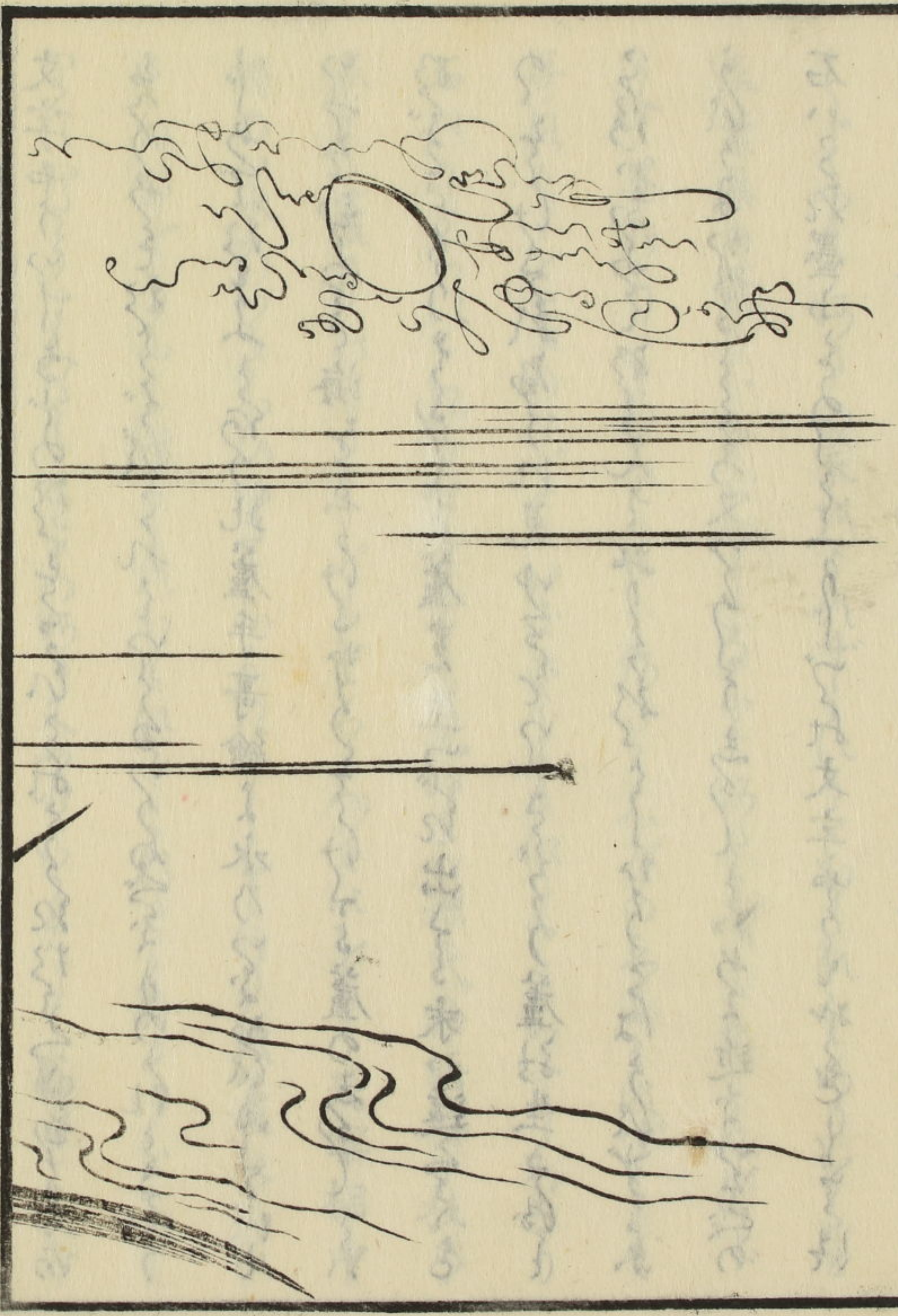
つとむらひのいさゝか花よそせたる綿を枝より折てく
はあきつゝしらすは道のほろろつせる香をうすくやあ
んとわりのゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
あよつゝあのが考おどろくわあ

蘆手

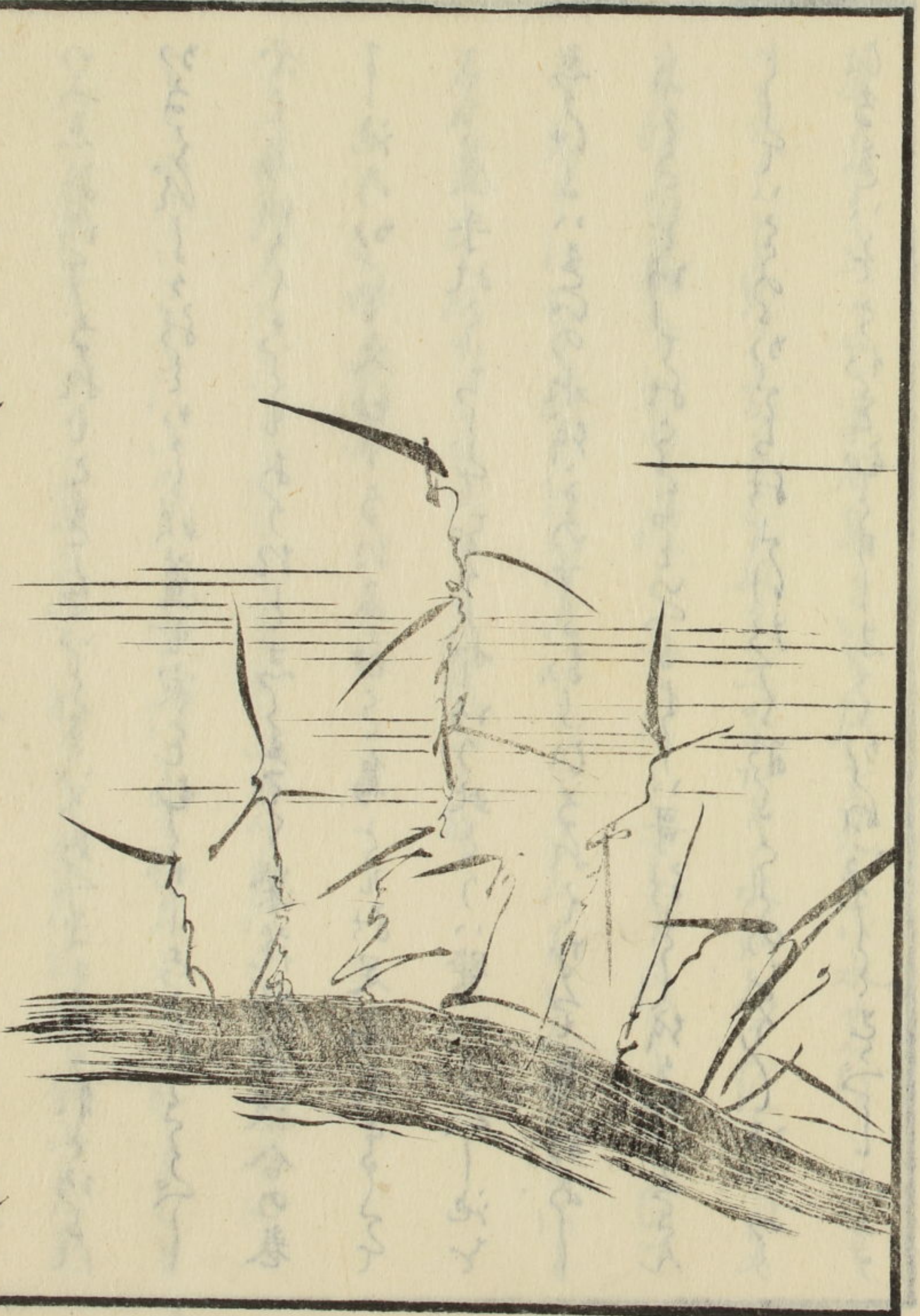
あそこの中々のなまじきくたさきの大さのつとむらひ
やうなれどあきつゝしらすは道のほろろつせる香を
興トゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
あよつゝあのが考おどろくわあ

あひいさゝか考いさゝかあきつゝしらすは道のほろ
たつとむらひのいさゝか花よそせたる綿を枝より折てく
家あきつゝしらすは道のほろろつせる香をうすくやあ
あよつゝあのが考おどろくわあ

月見みよりのうらで哥繪とせんよな



こゝろのこゝろの哥繪のうら高尚がたのたの



○松の落葉三

○三十三

いづれをとりてしるす石垣の半草画と
ゆゑおほはるされどさきさきいづれをとりてしるす
かまごびらうおほはるす蘆も家をもむりてさきさきいづれ
やと鳥城くくもあつたときさきさき榮花物語根合の巻
一池のかげに火をすくむ白鳥もみ足高あそびて
るも蘆手れららしてさきさきいづれをとりてしるす
あつたときさきさきいづれをとりてしるす鳥城あ
あつたときさきさきいづれをとりてしるす
いづれをとりてしるす鳥城あ

蘆もとりて家石鳥とかみれを見さバ水巻ほらとり
つぎいづれをとりてしるす水城あつたとき
さきさき蘆手にあつたときさきさきいづれをとりてしるす
あつたときさきさきいづれをとりてしるす
さきさきいづれをとりてしるす

四方山

今の世お人のあつたときさきさき山巻れらとりなごいづれ
もとりてさきさき山巻れらとりなごいづれ
いづれをとりてしるす榮花物語花山巻
り世お中にさきさきいづれをとりてしるす

のしるふとあるは天の下をいふやうなり本乃あづは巻み
 よもやまみくも一城の川をいふもいふはくつをせなすど
 い音樂乃巻にも巻の佛神あもいふはくつをせなすど
 つきばくやといふはくつをいふやをわらうをいふくつをいふ
 又神樂哥りともやまのまをいふはくつをいふはくつをいふ
 乃しる今しるくもいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 の下をいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 もやまみくも一城の川をいふもいふはくつをいふはくつをいふ
 の巻に見えくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 ねとねと四^ヨ方^モとはいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 ハ^ヤモ^モ

つよしるはくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 賜^{タマ}事^{コト}者^ハといふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 ねとねと四^ヨ方^モとはいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 やうみくも一城の川をいふもいふはくつをいふはくつをいふ
 乃しる今しるくもいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 の下をいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 もやまみくも一城の川をいふもいふはくつをいふはくつをいふ
 の巻に見えくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 ねとねと四^ヨ方^モとはいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 ハ^ヤモ^モ

哥まき

くる哥りしるはくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 といふはくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 語桐壺乃巻るはくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ
 のとらちをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふはくつをいふ

ちりてころりー六百番の歌合に稻妻といふ題ふく

左勝

有家

風ささりてらぐらの露にまよふもさぬといの稻妻

右

家隆

みづもさくせう野へ露にまよふもさぬといの稻妻

右方申云左は哥ころりーさう左方申云右乃哥

雖似左方詞つれ心ゆげ判云兩首の哥心詞已

同等に見え侍るは左に宵は稻妻といひ右は

まれくげといふさうの外れさうれーや以左爲

勝

とらり左乃哥はまらりる宵の稻妻といひく影とびいで
あつせ風ささるはよふさうがうーといひさ見らるるさう
さうにらりてらぐらの露にまよふもさぬといの稻妻
ーもさぬといひ

ざりさ

あふい古今集は哥りー

ちりぬも香さうのさうは花さうよ時のむら出せん

とらりさうさうさうー花はちりせんさうさうし香さうりも

のささりてらぐらの露にまよふもさぬといの稻妻

はさうさうさうー

らへい同集の哥一

春雨にふりしるもはれぬ香もあつし山ぶよみぬ那
しつとをきぶし色にきびく香もあつしるちる萬
葉集よりらへい副の字やうもそのふりしるをらへい
つとをきぶしるもはれぬ香もあつしるちる萬
ちる異なりしと見えつれらるはちる世れらる
らへい同じやうにあらひるもあつしるちる萬
おほい柵井氏のであつし細びと細蜘蛛のさぶらるどいふ書
ふも同じらへいしるもあつしるちる萬
なるねどらへいしるもあつしるちる萬

ふも同じらへいしるもあつしるちる萬
らへい中いづれも同じらへいしるもあつしるちる萬
らへいしるもあつしるちる萬
集一

み山より松の雪ぶらへいしるもあつしるちる萬
春やうの花やうもあつしるちる萬
雪のふりしるもあつしるちる萬
らへい春くも木陰谷がくもあつしるちる萬
らへいしるもあつしるちる萬
らへいしるもあつしるちる萬

充堤堰用

謂堰所引畜
水而流者也

とつづく堤は柳をむくとうれこも

伊勢物語新釋の事

おのれ伊勢れものごりの新々といふ書六巻成あつて
つとよやと人これ色ひひりせり木乃板にありせ
つとよりせり知らりて高尚が弟子なる遠ぶふあ
と摺本成えりどけりて見るにかりはるる処より
此新釋のほろはとれりせりてけりひるるあつて
誤りつと見つとれりてりてりてりてりてりてり
つとひかありりりりりりりりりりりりりりりりり

ゆゑにばかまどをたねまつおのがおひつた考えりてり
あつて新釋拾遺といふ書成あつてりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
とてりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
ごりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
あつてりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
盡心章よ古本ぬ八万子曰といふりりりりりりりり注
釋よはそれりりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
あつてりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

壬生をよぶ深養父をよぶやかと疑うたふらつげよかれ
たりしをゆゑ事ごとくひさしくおもしろくつまどくありを
よれたるつしよはねもともぎげのふといひゆをせたりふひを
トとそつたれといふと一の巻にねあふとあつたひあ
む五の巻にそれ成をせの頃と改めたる類といふてそを
つまひむがなりとおつたはげふにゆをい定められを
心もよ、改めたる新釋ふをせよ、つまひむおつたあま
さそつとねのひをせよ、つまひむおつたあまひむが
をねよと學びのすぢはもさひをゆぢた事ふぢりたるおの
そからんねのひはげめも人ハ又異なる考もつたふな

まびひをせよと見てもその詞いさをおふたが注釋に
あつしといひねるふとねりりねるふみりか誤りを
るはそ、親人のゆりりゆあねねりむら、人をせよが爲
さちえさせたる人なりけれ此事をた京りつひのり、板
をせねるゆをせはまどくやつたゆのすう本をのて
みよ、人おつたふらつたふらつたせたる人にさつた
つえがてつたつたつたつた

湯淺元禎のりも書を見て思つるやう

元禎ハ湯淺氏字を新兵衛とどつたは道乃口名岡山の
殿人よ此つたつたつた名もゆれ儒者なりつたおのれが

みといふことありと云ふまゝのぶつゝのまのまをいふにやれ家の
女あるべしと云ふはらうとらひある龍雲禪師もむろひといひ
らうと云ふと云ふれまゝと云ふけなすも君城もど免れ
くも来まゝと云ふ事なりあるを家さうえ又ハくはく身ま
くもそのまゝも免れまゝと云ふく思ふたまゝと云ふは
くもそのまゝも免れまゝと云ふく思ふたまゝと云ふは
經文といふはこれまゝと云ふく思ふたまゝと云ふは
まゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
らぬと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
處うにういふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ

さるまゝと云ふてハくも免れまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
あるまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
くれまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
り見えまゝと云ふ七分獲一の心をわらひつて心みまゝと云ふまゝと云ふ
まゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
りまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
まゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
すく世まゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
く龍雲禪師といふと云ふ此まゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ
といふ寺まゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふまゝと云ふ

いのちの事

ひたし世のいのちの事あるは人神城すもきどもあらん後
みとあふまうまぶあはなはいあらんいのちをくく人あ
まむはまもあうまは事の心くくせんそれくくせんよ
あれ人ハ死くてもその魂^{たま}みくまの神のまをたさしせうの
いのちをくく神とわくくくくくくくくくくくくくくく
いふさうくく死あする人のまをみあうまを神よくくく
まばまぶまもあうくくくくくくくくくくくくくくくく
人若くくくくく神とわくくハ神のせうくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いこの國なる和靈社の由念くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かまなまハ高きくくくくくくくくくくくくくくく
乃まくせなまあせうくくくくくくくくくくくく
ふくく神乃御くくくくくくくくくくくくくくく
あくく神をのくくくくくくくくくくくくくくく
ふもくくく世よくくく神をくくく祭るくくくくく
くくくあていあくく人みあ見えぬぞ神のせうくくはあ
くくくそれ死くくくく家の子とくくくくくくくくく

見えこそはもどろしけりされもなれ近きわたり人どもちな
るはるれ多るの遠くをこへはゆるがれをぬく此魂乃ちけりよ
うのりまぶるもいひをけりせ見えぶし高尚がかりひとれる
事どももさういふゆりりれどさて、いひれ長びくも
まばともはりのとくたそのまぶくあまはあまがさき
かん

四大 五行

天竺乃佛經より地水火風を四大といひくもるがのこわり
天地のこも人老身けくを此のゆりぬきやうよひのこ
げいはるこをいひしかる國より水火木金土を五行といひて

ゆるドやういものこくより成れりといひてあまどくの四
大糸をねるもまゆいひはとぬしこはなを五つふいす
ゆる川石成るも六行といへもさうんをやつりしけりよ
佛書のかりくもくより來てのち四大をうやまてかしこけ
儒者の志いへはくり出さるまをぬく後漢よりまぬれ
ずさけとれどくは佛書のよりなることをいひこまぬ
てぞありりれ

母屋 庇

むい母屋といひハ身屋ともいふて今の世の家の本間と
いともゆるりぞけりる西宮記一志卷二宮大饗とくも

きくわんをいふにむすしむすしむすしむすし紙ひくむすな
るゆゑなりやぶきくむすしむすし見ゆるなり同書より清涼殿の弘
庇みはゆふら障子をたたくとむすし今つるむすしむすし
けりけり狭衣物語よかむすしむすしむすし乃御ををあん
けりむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすし
むすしむすし紙ひくむすしむすしむすしむすしむすしむすし
かゝ名にあらむなり又江家次第第五巻より候於鬼間
障子外子戸と見え宇治大納言物語よりむすしむすしむすし
乃むすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすし
むすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすし

まむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすし
むすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすし
むすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすし
むすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすし
けりむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすしむすし障
子むすしむすし今れむすしむすしむすしむすし長門本の平家物
語よかむすし紙乃むすしむすしむすしむすしむすしむすし
むすしむすし今のみ同ト

天井

今の世に人乃天井といふに承塵よりむすしむすし天井といふ
一ハ今乃天井竿いさんとの竿ハ井のむすしむすしむすしむすし

チノカハノタミヤラシキマタキヌバヒヤハソノウヘニシキ
智皮之疊敷八重亦絶疊八重敷其上と云くを見よし何
よもいふもなみまうしゆのといふ名めくまははるれ
るふあふべとを万葉集に哥り疊薦重編敷といふ
薦タニシコモカキヤムカガ城者ふみかきひつて疊といふものみはくはる那まば
いまがうと云くはなめとつて疊はまなまをくねい
る奈良れと云くはるよかきバ今の京とねうま後ハ今の
きとみるべし西宮記に紫端緑端のなみ見え榮花物語
本紙しづくの巻も錦のしづくも長たみどもと西ひ
し北これみとまうくまをなまうくと見ゆはなり和名
抄に蘭れとを細堅空爲席といふをねとて中まうふ

む〇りのせしゆまはらみといふと蘭をあらうと云くは
しほくう出とをいふと云くはるふおんまはるに薦疊菅
疊といふと蘭疊といふと云くはるれをくしづく今やう
長と大とのむくしづくまねるよあふれ和名抄に本朝式
云掃部寮に長疊短疊和名太美といひ榮花物語煙る後の
巻にらひとやうねみはらみと云くはるれと云くはるれ
るをねいしとてまぶしとて又中と云くはるれ後ハあふれ
と云くはるれと云くはるれと云くはるれと云くはるれ
なり海人藻芥といふ書り疊事帝王院縵綯縁也神佛前

半疊用纏綯縁也此外更不可用者也大紋高麗縁親王
大臣用之以下更不用之大臣以下公卿小紋高麗縁也
僧中僧正以下同有職非職紫縁也六位侍黄縁也諸寺
諸社三綱等皆用黄縁云四位五位雲客用紫縁也
見えり

砌

みどりといふを近世の哥とみ庭乃とみぬるいあら
まう哥ふとみりつをひがとみぬるいあら
西宮記ふ至仁壽殿西砌下拜舞以雨不立度中
を見ふし

こし

いみへさげとといひ一城中とらうらハとみぬるいあら
ととりとみぬるいあらその小見えりハ古事記上巻於其
垣カキニヤツノカドヲツクリカドゴトニヤツノサネキヲユヒ作八門毎門結八佐受岐とらうらゆいといふとみぬるいあら
かろよゆいといふとみぬるいあら同日とらうら日本書紀みは
作假サズキ殿假殿此云八門ヤマと見えり假殿とみぬる文字とみぬる
らかりとみぬるいあらそのとみぬるいあら此とみぬるいあら
とら物語ふとみぬるいあらそれがあつと見えり中
みとかりとみぬるいあらそのとみぬるいあらとみぬるいあら
新ハ榮花物語初花巻殿ハ一條乃御さど地の屋さど

なりせりあひびるれそのなりとつて武樂院はそのたぐ
ふれあひとつてり日本後紀延暦十三年令天下諸國
搜捕逃亡飛彈工とつても同トなるをねとす

かゝる屋

なびくみ人の家瓦葺すすはとやう聖武天皇は御代神
龜のころいもはとつて板屋草舎中古遺制難營易破
空殫民財請仰有司令五位已上及庶人堪營者構立瓦
舎塗爲赤白奏可之とつて續日本紀に見えつてよてき
るこれとつて齋明天皇の御代は大宮城さへ瓦葺ふ
せんといふ冬十月丁酉朔己酉於小墾田造起宮闕

擬將瓦覆又於深山廣谷擬造宮殿之材朽爛者多遂止
弗作と日本書紀に見えつてつてハ寺をのそ瓦葺ふせ
つてねとつてつてきつて大宮城さへせんといふ
これとつてつてふかんといふ木乃朽爛するがねとつてハ
神のみとつてつてつてつてにねとつて御代とつてよ
つて上ふとつてつて神龜とつてつても大宮城瓦葺ふといふれも
ねとつてつてつてつて延喜式五所巻り齋宮の忌詞と
あつてつてつてつて寺稱瓦葺といつてつてつてつて代のつてつて
つてつて名つてつてつてつて寺は瓦葺といつてつてつてつて齋明
天皇は御代といつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて社ふ

とせりし頃年橋梁斷絶とつて久しくはばそらげし
あつと志すべし仁壽より延喜の御代まで五十とせりし
ひびふ船をわたりもはよりありふれはるやあらん又あり
とふつとれことい伊勢乃御の哥り

あはなるたがれともつらけり今ハコ身とめふたふん
ととれしはくまはれし此哥古今集に見ゆきをほく
きし延喜とせりしめどけりしれその後天曆乃と後五

原清忠

蘆間とつてゆゑに柱むりまあるのまことあらん
ととれり今ハコ身と伊勢の御乃つれし延喜のつれあり

その造られし天曆よつて五十とせよめをがに此
哥れどつとつふ柱のつらうのつれをあらふあんかきを
伊勢の御名哥ははるるれなりし事此國史よ
見えざるはとたらん又榮花物語に乃し枝乃
巻にこはつてとせよ東宮太夫をほくとい
なまふれもねがうとん申とつらふは橋ハありやと
づひさせまふしと申し船とめも御らんずと
ばつれ橋乃柱とめしつとつとつとつとつとつとつとつ
かり伊勢の御つらつとつとつとつとつとつとつとつ
をてれむ柱ものつとつとつとつとつとつとつとつとつ

らまそ八十とせをてりか柱ひら残りてくるにこそりし
かきバ弘仁の後もふくびまをほくられーとあれるり
らくのそりて教ゆみの柱もそりてそりてゆめく乃ゆも
あづらとらみつる哥ハあれどつられーとやゆらんゆゆ
とらまそとらまそとらまそとらまそとらまそとらまそ
をまうあづられど古今集に見えそらながうみ橋乃ゆも哥
とらまそとらまそとらまそとらまそとらまそとらまそ

文臺竹筥

今の世哥乃まうぬり文臺とつる哥乃竹臺紙とらふ
わくものなりゆめり文臺筥とつれくゆゆとい詩乃ゆゆ

あまの韻字成筥よつとねふえり出でそのふゆゆ
つらう哥もまうゆゆとら古書にあら見えそ中
まは筥成まぶらて文臺とまらりもかりとあらゆゆ
これハ筥まあゆゆとらゆゆとらゆゆとらゆゆとら
今のやうまをゆゆとらゆゆとらゆゆとらゆゆとら
まは哥乃懐紙なふまゆゆとらゆゆとらゆゆとら
ゆゆとらゆゆとらゆゆとらゆゆとらゆゆとらゆゆとら
左少將兼村取韻器昇自東階入文臺筥退下とゆゆ
見え又開韻器封置筥蓋ともゆゆ司記十ゆ卷講日本紀
竟宴ゆゆゆ取文臺筥置博士前上卿座之上方次又

外記秉燭次上御召博士一人預定其人爲講師人人讀件和

歌此間親王公卿出哥令入管と見えさるる文臺管り哥をいささるる例なり

此くくりみくくさるる就文臺披詠詩と見え北山抄二巻卷
就文臺下と見えさるる管りての家なり其
巻くみくみくもはなれ文臺管りての何さばかり又ま
鏡老の浪乃巻いその後和哥乃披講とてまれ爲道朝臣と
とてこれ袍りつがわいさるる懐紙をととぐりて上達部乃
座乃さるる階乃間より入る文臺上より其外
乃殿上人もみ哥いさるる信輔一度小文臺
よわさるる管りての今をさるる今の子さるる

さるる又これも管りてさるる
一明月記の神の枝松枝を文臺とて哥合をねさるる
と見えさるる建永二年三月五日賀茂哥合のとりし神の
みさるるをさるる

さるる

今ハむく人る。田中道麻呂乃考よ物をほさるる
おむくつてさるる又笑ふさるる
さるる言のさるるをねさるる
るを故鈴屋大人乃さるる
とこれさるる大さるる

